

A01a これまでの経過報告と本企画セッションの趣旨説明

高見英樹(国立天文台ハワイ観測所)、児玉忠恭(国立天文台)、富田晃彦(和歌山大)

現在光学赤外線天文学の世界では、欧米の NGST(口径 6.5m 程度の次期スペース望遠鏡) 計画や、米 Caltech・カリフォルニア大連合の CELT(口径 30m)、欧州の OWL(口径 100m) といった超大型地上望遠鏡計画がすでに具体化を開始しています。このような世界情勢の中、我が国の光赤外コミュニティにおいても「日本の光学赤外線天文学の将来計画」を考える気運が高まっています。国立天文台では、光赤外天文学を含めた将来計画ワーキンググループが 2001 年より活動を開始しました。この WG はコミュニティ有志と連携して、2002 年 2 月、6 月とシンポジウムを開催し、将来のサイエンス、プロジェクトについての議論を進めてきました。その後の、この 9 月に開かれました光天連主催の将来計画シンポジウムにおいては、より本格的な将来計画検討体制を作ることが提案されました。

それを受けて、国立天文台、宇宙研、大学などが共同して、「地上大型計画、スペース計画、サイエンス」それぞれについて検討班を設け、将来計画原案をつくる作業を、天文台を当面の窓口として進め始めつつあります。

今回の天文学会春季年会で企画セッションでは、光赤外を含めて天文学会全体として将来計画の気運を高め、次期サイエンスや構想をより具体化し深めていくことができると願っております。